

## 五 郷里と大阪

キャプテン・オブ・インダストリー

私が大学二年在学中のことであつた。経済史の試験問題に「ランカシアと大阪」というのが出題された。申すまでもなく、ランカシアというのは、英国の機業地で東の大阪に対峙している西方の雄である。私が大学の二年生であつた頃は、恰も昭和九年であつたから、綿業において大阪が急速度でランカシアを凌駕し、世界に揺ぎない覇権を確立した頃であつた。問題のポイントは、何故このように大阪が克くランカシアを抑えることが出来たかという、経済史的原因を説明することであると思つた。そこで、私は主として日本の女工さんの勤勉と能力と低賃銀、そしてこれらの諸条件を支えていた不合理な日本農村社会の構造に言及して、優をいただいた記憶がある。

私の幼少年時代、私の郷里讃岐の農村には、鐘紡をはじめ、大小の紡績会社から女工、時には男工の募集の手が伸びてきていた。紡績会社と特約を結んで、その手先となつて募集の仲介をしている人もあつた。後で直接聞いた話だが、鐘紡の山田前副社長も、お若い頃私の田舎を隅々ま

で歩いて工員の募集に従事したことがあるそうである。かくて多くの子女が、田園から大阪に続々と出稼ぎをしたものである。

これらの人々は、暫くする程に、間違えるように立派になって、休暇や事ある毎に郷里に帰ってきた。女の人は、色が白くなり、お化粧が上手になって、田舎の青年にとつては、全く魅力ある女性になっていた。男の人も、サツパリとした洋服を着こなして、一かどの青年紳士のように見えた。又これらの人は、父兄に対してそれ相当の仕送りをするものだから、工員の父兄は、生計難がそれだけ助かり、人によっては主家や付屬家を建て直すものさえ出てくる始末であった。又この人達は、イギリスの職工さんより恐ろしく低い賃銀で何倍もの能率を上げつつよく働いた。埃くさい不潔な工場が多かったが、何の文句もいわないでよく働いた。かくて日本の紡績業はグングン伸びたのである。

ところが、その結果、気の毒な人も出てきた。病氣（といっても主として呼吸器疾患であるが）にかかつて、青白い顔をして田舎に帰ってきて、静養する人が見受けられるようになってきた。親達は、これ又一生懸命に子供の病気を治してやろうとして、家計をきりつめて、栄養を摂取させたりしていたものである。中には、もっと悪い病気に感染したり、都会で墮落したりして、哀れな末路になった人も皆無ではなかったようだ。

今でこそ、労働基準法とか、労働者災害補償法とかいう労働保護制度が確立されているが、当時の日本の労働界は、かかる労働保護立法に恵まれていなかった。病気になるったり、罹災した場合は、大抵の場合、田舎に帰ってきたものである。又当時の百姓衆は、それを不思議とも不都合ともとらないで、当然のこととして、病める子女を自己の温い腕に迎えたものである。農村は、こういう人にとっての唯一のオアシスであり、悪くいえば掃き溜でもあつたわけである。

日本資本主義の歴史は、くしくもこうした農村のもつ不合理な構造に、その発展の弾力を求めてきたわけである。その是非善悪の批判は、色々の角度からなされようが、これからの日本資本主義の復興や再建は、その当時のように、農村の不合理な地盤に依存することではなくて、もつと新しい活路を逞しく開拓するよう努力しなければならぬものと思う。

私が代議士になってから、在阪、在神の郷党の出身者とお目にかかる機会が時折恵まれるのであるが、私はかような会合に出るのを一つの楽しみにしている。香川県出身者は阪神の各界に大きい地盤をもっている。特に実業界に雄飛している方々が目立つ。ところが面白いことには、実業界に大きく伸びた人々の中では、これという学歴もなく、全く独力で、風雪の労苦に耐えられた、セルフ・メイド・マンが多いということである。恐らくは、讃岐の田舎で小牛をかって耕す土地もないので、海の彼方の商工都市に活路を求められ、しんげん袋をかついで出稼ぎされた

人々であるう。

勿論かかる環境にあつた多くの人々が悉く立身出世したものは思えないが、克く風雪の苦しみに耐え、人情の網の目をくぐり、一心不乱に仕事に打込まれ、大きい信用を自らの手で獲得した人々が、成功されたにちがいない。近頃大学卒業生の就職問題に日夜心を砕いている私は、それらの若い学徒に「男子よろしくおう、こ一本で働き、自力で運命を開拓する野心なきや」と要求したいような焦燥を覚えるのである。男子の念一度立てば、その志をとげる場合は、その真剣な努力を通して拓かれて行くものであるという確信を、これらの先達の事蹟に照して、失つてはいけないと思う。

ある歴史家は、「都市は永遠に化膿する腫物である」と規定した。今日の都市、無限に膨脹と化膿を続ける都会は、若い無垢な青年にとつて必ずしもよい生活条件を提供するものとはいえない。しかし現在の都市の生命を保持しつづけている力は、年々歳々都市に新陳し代謝している農村青年の活力である。この大都市という怪物に挑みその生命力の更新を齎す力は、何といつても農村青年のもつヴァイタリテイでなければならぬ。阪神に大きい生命力発揚の場を見出した先達の先蹤を追つて、野生的生命力の燃焼を阪神その他に求める青年諸君の奮起を促すや切なるものがある。（昭、三〇・一〇補）

## 六 百姓・地主・商人

地方財政どこへ行く

私が子供の頃には、私の田舎の大きい百姓家で、砂糖を栽培したり製造している家が多かった。夏に植えて、稲の刈入れや麦蒔がすんで木枯の吹く寒い頃、五、六尺にのびた砂糖キビを、掘って皮をむき、これを絞って炊いて固めて、黒い砂糖を作っていた。四斗樽に詰められた砂糖が、何本も庭先に並ぶ頃、商人が大きい天秤棒をかついでやってくる。四斗樽に詰められた砂糖を風袋込みで計るのである。天秤棒の端にかかった分銅が、十分上りきらない直前に、商人は分銅をつるした縄の根っこを巧みにひねって、何貫何百匁と宣告するのであった。

子供心に、私は、もう少しその分銅が上りつめて、上下の運動が静止したところを見て、公正にその重量を計ってもらいたいものだと考えたことが度々あった。ズルイ奴だと思ったが、百姓衆はこれに何の抗議もしなかった。この砂糖の商売で、数力年の間に、巨万の富を蓄えた人が、私の村にも出来たのである。農村において買叩かれるということは、何も砂糖に限ったことではない。青田売買だとか、立毛売買のように、商人の金融力が加わってくると、問題は更に面倒になってくる。

農村の断面

ところが逆に、百姓衆は物を買うのが下手である。縁日商人の巧妙な舌に巻かれて、粗悪な品

を割高に買わされる等ということは、商品の知識に乏しい百姓にとってよくあることである。商況に対する情報は今日では、新聞やラジオを通して、相当行き届いてはきているが、当時においては、極めて乏しいものであった。従つて商人にしてやられるということが、自然、多かつたにちがいない。

肥料等は、大抵の場合、金融と結びついていた。肥料商は、多くの場合、地主を兼ねていて、植付や種蒔用の肥料を百姓に供給してやった。そして出来秋になつてから、相当高歩の利子と併せて、年貢米の形や、保有米を売った金でその「決済」をさせていた。又これらの肥料商は、肥料を通しての金融の他に、療養費、教育費、冠婚葬祭費等の不時の費用も併せて金融していた。百姓衆はこの「旦那」に抑えられて、身動きも出来なくなつていたし、主従の關係に近い、従屬關係がそこに形成され、維持されてもいたのである。

尤もかような地主を一概に非難するのは当らない。地主金融の方式は、当時の農村にとつては、掛替のない金融方式であつたし、地主の中には本當に親切な人々もいた。彼等は恩情を傾けて、輩下の百姓衆がそのなりわいを維持して行けるように、こまごまとした配慮を怠らないで、慈父のように敬慕されている方も少くはなかつた。

そして又その地主の家族も謙遜であり質素であつて、自ら率先して勤儉貯蓄の先達になつていた人も多かつた。水害が起きて、池塘や、田地が流された場合においては、政府の力を俟つまで

もなく、地主自ら相当の復旧費を支出してくれたりした。私の父は野々池という五十町ばかりを灌漑している水利組合の総代をしていたので、水利組合の大きい問題は、細大洩らさず、今井家や田中家という地主兼肥料商の「旦那」に報告し、その指示をうけたり援助を求めるのを常としていたようである。

一粒の米が便所の踏板におちていても、自らそれを拾って食べたという鳥取家の節儉ぶりや篤農ぶりは、そこら界限の人口に永く膾炙された美談となっていた。これ等の地主も、終戦後の農地解放の影響を受けて、今では見るかげもなく、落魄の運命を辿っている。農業土木の工事は、一切県庁や中央政府の役人の手に移って、政府依存の度が高くなってしまった。

地主没落と共に、土木事業の一切の責任は中央地方の政府の責任になってきたし、地元においてもそれを当然だと考えるようになってきた。ところが川や道路がこわれて困るのは役人ではなくて地元の人々である。又川や道路や用水路の復旧に一番熱意をもつのも、役人衆ではなくて地元の人々である。そうだとすればその人達が、度々の陳情によってちよっぴり、予算の分け前にあがりつき、役人衆の悠長な工事ぶりを傍観する姿は決して本来の在り方ではないように思われる。

私はこの頃になって、しみじみと地主の功罪を考えさせられるのであるが、同時に、今日の財政のやり方や政治の運び方に大きい不満を覚えるものである。(昭、二八・八)